

氏名・(本籍地)	木内 堯大 (東京都)
学位の種類	博士 (仏教学)
学位記の番号	甲第 47 号
学位授与の日付	平成 20 年 3 月 15 日
学位論文題目	伝教大師教学の基礎的研究 —守護国界章の注釈的研究を通して—
論文審査委員	主査 多田 孝正 副査 多田 孝文 副査 塩入 法道

木内 堯大氏 学位請求論文審査報告書

「伝教大師教学の基礎的研究 —守護国界章の注釈的研究を通して—」

論文の内容の要旨

本論文は、最澄の名著『守護国界章』の全訳注を試みた上で、この著作の文献学的問題から、さらに最澄の思想形成やその仏教観を論じたものである。なお論文の体裁上は、訳注部分は論文の第四章に置かれている。

第一章「中辺義鏡の批判対象」では、『守護国界章』は現存していない徳一の『中辺義鏡』に対する反駁書であるが、その『中辺義鏡』が批判対象としたとされる仮称『天台法華義』なる書物が最澄の著したものであるか、最澄以外の最澄に近い人物が著したものであるか、という問題を論じている。

この書物には天台教学を正しく理解していない点が見られ、最澄の書でないというのが現在の学会の趨勢であるが、化儀四教と五時教判との対応問題や、非情仏性説について詳細に考察した結果、『天台法華義』が最澄の書であっても矛盾せず、また徳一も複数の文献に対して批判した可能性もあると結論づける。

第二章は「守護国界章における引用文献の考察」と題し、『守護国界章』における最澄の各宗教学への「依憑的」態度、特に華嚴学の受容について、本書に引用される法蔵・慧苑・澄観・李通玄等、華嚴の諸師の文献を詳しく検討する。そして最澄のこのような態度は、最澄自身が法蔵の著作を通して天台の教学に邂逅したことにもより、また華嚴宗諸師が天台に依憑していることとも表裏一体関係であり、さらに最澄の諸宗融合的態度とも関連すると述べる。

第三章は「守護国界章から法華秀句へ」というテーマで、最澄が自己の独自の教学を確立するために、後に法華至上主義的な立場に変わっていく思想展開を論じている。

すなわち『守護国界章』時点の最澄は、他宗の教学に天台教学との相関性のあることを主張することにより、天台宗の存在意義を示したといえるが、晩年の著作である『法華秀句』に至っては、この依憑的態度を捨て去ったと述べる。それは依憑的態度が、逆に天台教学と他宗の教学が同一化し、天台宗の独自性

が失われる結果をもたらすという最澄の意識の変化によるものであるとする。

『法華秀句』では、智顛の教学に当然のこととして説かれている華嚴経や瓔珞経に由来する五十二位説や涅槃経による五味譬は用いず、専ら法華経に由来する教義に基づいて即身成仏説等を論じ、いわば法華至上主義の立場に立って比叡山の天台宗を確立しようという態度が明確に顕れ、従来の天台教学とは逸脱するが、最澄独自の天台教学を目指したと結論する。

第四章は、上述のように『守護国界章』全巻の原文、経論の引用文、訓読、内容の概要、口語訳に注釈を付したものである。

審査結果の要旨

伝教大師最澄は、直接その思想を論じた著作が少なく、『照権実鏡』『守護国界章』『決権実論』『法華秀句』など、会津の徳一との往復論争の書物からその思想を探らざる得ないところがある。この論争はいわゆる三一権実論争であるが、問題が複雑なのは、徳一の書物が現存しておらず、彼が最澄あるいは天台のいかなる書物に対して批判したかも不明確なことである。これらの障害を乗り越えて、最澄の著作から、経論の引用、最澄の説、徳一の説を明確にしていく努力が先学によりなされてきた。

本論文は、まずこれらの中でも最も大部である『守護国界章』の全訳注を試み、詳細に検討した上で、第一章では、幻の『天台法華義』が従来の学説とはやや異なり、徳一の引用している文章をよく読めば、最澄の書であっても矛盾はないということを論証している。この点は評価できよう。

ただし最澄がなぜこのような煩瑣きわまる書物を著したか、また後世の末疏がほとんどないことから分かるように、見方によってはあまり建設的でないともいえる議論に情熱を傾けたか、本論のテーマからは外れるかもしれないが、当時の様々な情勢を踏まえて考察する部分もあってよかったと惜まれる。そのことは、第三章で述べる最澄の仏教観の変化を考える上でも何らかの示唆を与えてたのではなかろうか。

また第二章で論じられる最澄の依憑的態度については、特に華嚴の諸師の書物を検討した上で、意義ある結果を導いている。しかしこの「依憑的」という概念については、教学の問題ばかりではなく、広い意味で考察することで、最澄の『守護国界章』執筆当時の置かれた立場がよりうかがえたのではないと思われる。

第三章の、最澄の法華主義については、『法華秀句』においては確かにその通りであろう。しかし一方、晩年の『血脈譜』では、最澄は禅・天台法華・菩薩戒・密教の血脈を記して四宗相承明かし、『山家学生式』では遮那業・止観業の併業を述べて顕密一致を建前としている。この四宗相承と顕密一致の考えによって、比叡山の天台宗は総合的仏教を目指したということが通説になっている。これらのことと法華至上主義が、最澄においてどのように整合性をもっていたのか、四宗相承と顕密一致は叡山の新しい仏教の公認のための方便であったのか、権威付けであったのか、これらの問題についても言及がほしかった。

第四章は『守護国界章』全巻の原文、経論の引用文、訓読、内容の概要、口語訳を行い、丁寧に注釈を施している。ただし、注釈の中には、本文を見る上では直接関係のない仏教語の一般的解釈や、普通の漢語の説明など不適切なものも多い。整理する必要があるだろう。

本論文は、若干の難点もあるが『守護国界章』という大部の訳注の成果とともに、従来の研究に新たな問題を投げたものであり、課程博士学位論文としてその成果を認めることができる。